

【「文学的文章の読解」の問題】

- 1 次の文章は小鳩さんが国語の授業で書いた物語風作文です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

香織はいつまでたっても、決められないでいた。

いつもそうだ。来月の三者面談では、受検する高校を決めなくてはいけないのに、まだ決まっていない。

今だって、悩んで、迷って、結論を出せないでいる。どうしてこんなに優柔不断なのだろうと、つくづく自分が嫌になる。

日はだいたい西に傾いている。校庭からは運動部の掛け声が響いている。

目の前にいる大悟は、何を考えているのか、その表情からは読み取れない。ずっと、遠くの空を眺めているようにも見え、香織を責め立てているようにも見える。

「で、どっちにするんだ？」

大悟の声は、判決を言い渡す裁判官のように、はっきりとした口調だった。

いつもそうだ。決められない香織を差し置いて、大悟はすぐに物事を決めてしまう。今回も早々と、文化祭で演じる役を、クラスの誰よりも早く、あっさりと決めた。迷いが無い。そんな大悟をうらやましく思うし、不思議にも思う。どうして大悟はそんなに迷いなく決められるのだろう。

残った役はお姫様のお世話係か、カエルになったお姫様をもとに戻す魔法使いの役か。

大して違いがあるわけではない。どちらもセリフは少ない。クラスのみんなは、大悟のあとに続いて、次々に立候補し、役を決めていった。あとは、私と、今日休んでいる由佳の二人だけ……。

「やっぱりさ。由佳の意見も聞いた方がいいよ。なんでもいいって言ってたけど、休んでる人を差し置いて決めるなんて、由佳がかわいそうだよ。」

①我ながらひきょうだと思った。

「本気でそう思っているのか？」

大悟は、責めるような口調で言った。バレー部の整理体操の掛け声が聞こえる。もう日は沈もうとしている。練習はおしまいだろう。

見透かされている。結局、由佳を気づかうふりして、自分で決めたくないだけだ。由佳がどちらか決めてくれれば、自動的に自分の役が決まる。みんなに配慮しているつもりで、自分で選びたくないだけだ。

ただ、怖いだけなんだ。自分で自分のことを決めることが――。

「なんで大悟はいつもそんなに早く決められるの？」

②窓側に立っている大悟の顔は、逆光になってよくわからない。

「迷ったりしないの？今回だって、王子様なんて、柄じゃないよ。」

大悟はだれもやりたがらないであろう、主役を一番に買って出た。

「ーみんな、やらないだろう。主役なんて。セリフが多いしさ。」

「だからって……。大悟がやらなくてもいいじゃない。」

「嫌なんだ。押し付け合って、決まらないの。」

ああ、そうか。大悟は自分でやりたいことを選んでるわけではないんだ。だからいつも決めるのが早いんだ。だれもやりたがらない、余りそうな嫌な役を自分から買って出たんだ。学級委員に立候補したのもそうだ。自分がやりたいということより、クラスがいがみ合わないことを優先しているんだ。それが大悟の「やりたいこと」なんだ。

「やりたくないこと、やるって辛いじゃないの？」

③日は、完全に沈んだ。

①「我ながら、ひきようだと思った。
十一文字で書き抜きなさい。（句読点は一

9レベル

から

問二

ア、香織が大悟の考えを図りかねている様子
イ、決められない香織のことを、大悟が怒つて
ウ、香織が自分を責める大悟に反感を抱いて
エ、大悟が香織のひきょうさにあきれている様

問三

レベル9

ア、由佳を利用して役を決めようとした香織のひきようさ。
イ、「やるべきこと」をやるといふ大人な考えをもっている大悟の立派さ。
ウ、みんなのことを優先する大悟に対する、香織のいらだち。
エ、文化祭の役すら、まともに決められない香織のふがいなさ。

